

園番号 808

## 令和6年度 奈良市立伏見保育園 研究実践概要

園長名 北村 真由美  
全園児数 182名

### 1. 研究主題

「やりたい」「やってみよう」と思える主体性への一歩  
～ワクワク出来る遊びの場をつくっていくために～

### 2. 研究年度 3年度

### 3. 研究主題設定理由

「やりたい」「やってみよう」と思える主体性を育む遊びの環境や援助のあり方の研究が3年目となり、0歳児から5歳児までの園児が、自分のしたい遊びをしたり、友達と一緒に好きな遊びを見つれたり、その遊びが少しずつ継続して遊ぶ姿が見られるようになってきたりしている。昨年度の取り組みや成果・課題をもとに、さらに子ども達の「やりたい」「やってみよう」の気持ちを引き出すためには、どのように環境を整え関わりをもったらよいのか、昨年度に引き続き研究主題として設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

「やりたい」「やってみよう」と子どもがワクワクと心を動かして遊べる環境とはどのような環境なのかを考え、主体的に遊べる子どもを育てる。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について職員間で共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
- ・子どもが遊ぶ中で心動かされている場面を捉え、それに応じた環境構成や援助のあり方について考える。

#### ③活動の方法

~~~~~ 援助と環境に工夫 ~~~~~ 主体的に遊んでいる姿

【0歳児 「できるかな～？」12月】

体を使った遊びを楽しむことができるように「できるかな」の絵本を音楽に合わせて遊んでいた。他児が音楽に合わせて手足を動かしたり、体を揺らしたりして楽しむ中、初めての遊びに不安や緊張を感じたA児は離れた所からじっとその様子を見ていた。“やってみようかな！”と思えるように、無理に誘いかけず、側に寄り添い「またやってみようね」と声を掛けるだけにした。その後もA児の側で保育者が楽しむ姿を見せたり、「やってみよう。」とした時「楽しかったね。」と声を掛けたりした。繰り返したり周りの子の姿を見たりしたことで、12月頃になると音楽が聞こえてくると一目散にオーディオの側に駆け寄り、のびのびと体操を楽しんでいた。曲が終わると満足気に拍手をしていた。



#### <評価・反省>

初めてのことに不安や緊張を感じるA児を無理に誘わず、スモールステップで楽しめる

ように援助した事で“やってみようかな?” “またやりたい!” という姿につながった。保育者自身も楽しむ事で安心した雰囲気の中でのびのびと体を動かすことができた。今後も子どもの姿に応じて心を動かせる援助や環境設定を大切にしていきたい。

【1 歳児 やった～！できた！ ○まで跳べた！！】

4月から継続して遊んでいるサーキット遊び。子ども達の“やってみたい”という興味に合わせてジャンプ台を高くしたり、はしごを平行から少し斜めにしたりして楽しめるようにした。最初はジャンプ台の下に普通のマットを敷いていたが、子どもの「とんでいみたい」「やってみよう」という気持ちにつながったらいいなと思い、○印が書いてあるマットに替えてみた。すると、ジャンプ台の下に○印が書いてあるのを見つけたA児は○印をめがけて跳び始めた。それを見つけた保育者が「Aくん、○まで跳べたね。すごい！」と言うと「跳んだ♪」とすごく嬉しそうな表情をした。それからA児は何度も○まで跳んでいた。それを見ていた他児も同じように“やってみたい”という思いで繰り返し遊んでいた。



《評価・反省》

日常のささいな子どもの反応を見逃さず、常にアンテナを張り“もしかしたらこうかもしれない…” “もっとこうなるかな…” など職員間で様々な子ども達の姿を予想しながら環境を整えたことで、子ども達の「やってみたい」という気持ちにつながることができた。今回のA児や他児の姿から、子ども達の無限の“やってみたい”の思いを大切にこれからも援助し、環境構成していきたい。

【2 歳児 「はっぱのおふろみたい！」 12月 】

園庭にあるイチョウの木の紅葉を見て「はっぱがきれいだよ」と教えてくれた子ども達。ひらひらと落ちてくる葉っぱを見て葉っぱを集め始めた。「いっしょにやろう」「よいしょ」と友達同士で声を掛け合い、やり取りを楽しんでいる。しばらく同じ場所で葉っぱを集めていた子ども達に「こっちにも葉っぱがあるよ」と伝え、すると「こっちにもはっぱあるって」「いこう」と友達を呼び協力して葉っぱ集めをしていた。いろいろな場所で集めた葉っぱを1つのタイヤの中に入れ「いっぱいになった！」とにこにこ友達と顔を見合わせていた。その中でそーっとタイヤを覗いたり、足を入れたりする子が出てきてタイヤの中に入る遊びを楽しみ始めた。「タイヤの中はとうですか？」と保育者が尋ねると「はっぱのおふろみたい」「きもちいい」と子ども達からの声。それを聞いた周りの子ども達も集まってきて「つぎ、かわって」と大人気のお風呂になった。



＜評価・反省＞

季節的にも紅葉が感じられる時期であり、子ども達と色の変化や落葉など自然を感じることが出来た。園庭のいたるところに葉っぱが落ちていることを知らせることで、子ども同士で知らせ合い一緒に楽しむことができた。また、タイヤの中に葉っぱを集めたのは子ども自身の発想で、中に入った子どもにどのような問いかけが良いか悩んだが、「タイヤの中はとうですか。」と見たまま声を掛けてみた。問いかけたことで子どもなりに想像し、お風呂に見立てて楽しむ様子を言葉で表現することにつながったと思う。

また保育者の仲立ちのもと、子ども同士の関わりを多くもてる機会を今後も増やしていきたい。

【3歳児 釣り 11月】

体育用具（跳び箱、平均台、巧技台など）の置いている場所で、1人の子どもが虫取り網を持って座っていた。「何しているの？」と聞くと「釣りしてる。」「へー。釣りしているの」。そこにまた1人子どもが来て、同じように虫取り網を持って釣りを始め、それを見ていた数人の子ども達と一緒に遊び始めた。巧技台や跳び箱など、高く積んであったので危ないかなと思ったが様子を見ていた。だんだん子どもが増えていき、「危ないよ。」と声をかけようか迷ったが自ら遊びだしていたので見守ることにした。さり気なく高いものは少し低くし、狭い所は物を動かして広くした。最初に釣りをしていた子どもが、砂場に走っていき海の生き物（イカ、カニ、魚、クジラ、イルカ、ヒトデ）の型抜きをたくさん持ってきて、釣りをしている所に置いた。そして虫取り網でその魚（型抜き）をすくって「釣れたー」と言い、パクパクと食べる真似をした。他の子どもが砂場に行き、フライパンを持って釣った魚を焼き、食べた。「お魚焼いたの？」「おうちでママが焼いてくれる」「お魚好き？」「うん。好き」。保育者も子ども達の中に入って会話を楽しんだ。自分の経験したことを遊びに取り入れ、自分なりにイメージを広げて遊んでいた。



<評価・反省>

自分の経験したことや日頃の生活が遊びにつながっている。友達の良い真似をして遊んだり、一緒に遊んだりしながらやり取りを楽しみ、共有している。

体育用具置き場という、本来は遊ぶ場ではない場所での遊びだったが、すぐに「そこは遊ぶ場所ではないよ。」と言うのではなく、危険な時は対応できるようにしながら遊びを見守った。そうしたことで、遊びが広がっていった。子どもの発想を大事にし、側で見守りながら、必要に応じて声を掛けるなど、子ども同士で遊びが展開できるようにしていきたい。

【4歳児 「めっちゃシュー！ってなった！」 7～8月】

夏から保育室や廊下で転がし遊びを楽しんでいるA児とB児。ボールを転がしながらコースの傾斜を繰り返し考えたり、ボールの重さにより転がるスピードが変化することに気付いたりしている。ある日、砂場でトイやビールケースを使ってコースを考えていたA児とB児は近くに置いていたガチャガチャのボール（以後ボール）を「もっとシュー！って転がしたいんだけど」と二人で相談をしていた。思う存分試せるように広く場を取ったうえで「どうしたらシューってなるんだろう？」と声を掛けると、A児が「そうだ！水も一緒に流してウォーターライダーにしたらいんじゃない？」と考えを伝えた。「いいね！一回やってみる？」と声をかけると二人は早速バケツに水を入れて準備をし、ボールを転がしてからすぐにバケツの水を流してみた。しかし、ボールが先に転がり終わってしまい、水が追い付かない。二人は「なんでだろう」「どうする？」と何度も繰り返し試行錯誤しているが、保育者は二人が考えたことを試してほしいと思い、見守った。すると、「水が入ったバケツの中に一緒にボール入れたらどう？」と新たな考えが出た。B児は「ちょっとやってみよう」「できるんじゃない？」と言い、実際にやってみると「いけー！おおー！めっちゃシューって速くなった！」と二人がイメージしていた通りにボールが転がり落ちていった。その後は園庭にあったシャワーホースを見つけ、「これでずっとお水が流れるで」と水を流し続けながら、ボールを転がして遊んでいた。



<評価・反省>

「速く転がしたい」という同じ目的に向かう中で自分なりの言葉や表現の仕方で友達に思いや考えを伝えたり、友達の思いを受け入れようとしていたりしていた。また、友達と一緒に取り組むことの楽しさやおもしろさを感じたり、達成感を共有したりしている姿も見られた。



目的を実現するために、トイやビールケースの組み合わせ方を考えたり園内にあるもので使えるものを選んだりなど普通の遊びの経験や知識が活かされた事例だと感じる。

A 児と B 児は夏から転がし遊びを楽しんでいるが、その後も他児を含めて保育室や廊下で複雑なコースやゴールをつくりながら転がし遊びが続いている。子ども達と一緒に遊ぶ中で遊びの過程や様子を捉えながら一緒に環境構成をし、「やりたい」「やってみよう」の気持ちを引き出していきたい。

#### 【5 歳児 きらきら発表の取り組み 4 月～1 月】

4 月から主体的に自ら遊びや「やってみよう」ということを見つけ、“がんばってみようとする力”をつけてほしいという思いから遊びの中でがんばったことを発表する『きらきら発表』という取り組みを行ってきた。「〇〇ができるようになった。」「〇〇ちゃん、ドッジボール上手やった。」など、“自分や友達の頑張り＝きらきら”を見つけて発表し、みんなに認めてもらうことで自信をもつ姿が見られた。1 月に入り、小学生になるまでの 3 カ月までがんばってみたいこと（目標）をみんなで考えた。A 児は、「逆上がりができるようになりたい。」と目標を立てて挑戦していたが、「難しい」とあきらめモードに入っていた。その矢先、「大縄跳びで 50 回跳ぶ！」という目標を立てていた B 児が目標を達成し、みんなの前で堂々と発表した。そして、保育者から花丸をもらい、次の目標を立てた。それを見た A 児は、「私も頑張りたい！」「やってみたい！」と次の日から意欲的に鉄棒に取り組むようになった。保育者の補助を求めたり、逆上がりができる友達にコツを聞いたりする姿が見られた。A 児のがんばる姿に影響され、やってみようとする友達が増え、互いに補助し合うなど協力して逆上がりの練習をする姿へとつながった。



#### （評価・反省）

「きらきら発表」の場を持つことで、自ら「やってみよう」「もっとやってみよう」とできるようになることにワクワクと期待を持ちながら取り組む姿、目標に向けて頑張るという姿につながった。できるようになるまで継続して取り組み、達成したことが自信になり意欲を高めた。また、友達の目標を達成するために協力し、できたことを喜び合う思いやりのある関わりも見られた。友達からの刺激、達成感、認められることで生まれる自信が子どもの意欲や主体性につながるということがわかった。就学後も、自分なりの目標をもって様々なことに意欲的に挑戦してほしい。

#### 5. 研究の成果

0 歳児から 5 歳児まで、年齢や発達の違いがあっても子ども達それぞれに「やってみたい。やってみよう」という気持ちを持つタイミングがあり、保育者がそのタイミングを見逃さず寄り添い応じることができているかが大切であるとわかった。

また、保育者もワクワクと心動かし、その瞬間、瞬間にあった声掛けや援助、環境の工夫等を行うことで、子ども自ら考えたり試したり発見したり「もっとやってみよう」という姿につながると感じた。

#### 6. 今後の課題

子ども自らワクワクと心動かして主体的に遊ぶために、一人一人の子どもの発達や興味に応じた保育内容の充実を図る。保育者が子どもの発見や気づきを共に楽しみながら、子どもの遊びを丁寧に見取り、子ども理解を深めながら、子どもの主体性を育む環境構成の工夫や援助についてさらに学びを深めていきたい。